

新しく生まれ出る手話は、研究者の活動で息絶えることはない—— 言語学者は何を危惧しているか

新しく発生した手話の性質は、すべての言語がどのように進化したのかを明らかにできる可能性がある。しかし今後の存続がまだ確立していとは言えない言語を、研究のためとはいえ孤立させたままにすることは、その言語を頼りに生きている人々が時代に遅れをとることを意味するかもしれない。

ウェブマガジン「Mosaic（モザイク）」2019年2月26日掲載記事

マイケル・エラード(Michael Erard)

(英語原文)

<https://medium.com/mosaic-science/studying-an-emerging-sign-language-wont-kill-it-so-what-are-linguists-scared-of-ce5bbafc08ca>

コニー・デボス(Connie de Vos)は、ただ眺めていた。彼女が初めてバリ島のブンカラ村に滞在した2006年、人々は毎晩デボスの家にやってきては、玄関前のポーチの床に座り、果物やドリアン味の飴を食べたり、お茶を飲んだりしていた。8-10人程の人々が、薄暗い中で手をひらひらさせながら、地元の手話であるカタコロク(Kata Kolok)でおしゃべりしていた。「次の儀式はどこ?」「次のお葬式はいつ?」「さっき亡くなったって誰のこと?」

カタコロクは約120年前にブンカラ村で生まれ、動詞の手話をしながら舌を突き出すと「～しない」という(否定の)意味になるなど、独自の文法を備えている。アメリカ手話では手話を表しながら口で特別な音を出すことはないが、カタコロクでは、合わせた唇を軽く弾いて「パッ」と音を出すことで、動作が完了したことを表す。

「(夕方)6時ごろ村を歩いているとね、村の人たちが晩ごはんを食べる前にお風呂に入っているのですが」デボスは回想しながら言う。「(訳注：お風呂終わったよという意味の)「パッ」「パッ」「パッ」という音があちこちから聞こえてくるんです。」

当時、マックスプランク心理言語学研究所 (Max Planck Institute of Psycholinguistics) の大学院生だったデボスは、カタコロクの文法と手話表現を記録する初めての言語学者としてブンカラ村にやってきた。カタコロクは、比較的多くのろう住民がいる孤立したコミュニティで発生したもので、その当時は「手つかずの状態だった」とデボスは話す。2000年代に報告され始めた他の村落手話(village sign languages)と同じように、カタコロクにも研究対象として調査すべきことがたくさんあった。調査結果を自分が最初に報告すれば、高い評価を受ける業績になることをデボスはわかっていた。

しかし、ある現象を研究することには、その本質を変化させてしまう危険性がつきものだ。考古学者は古代の墓の内部を調査する研究者の呼吸で、現場の湿度があがってしまうことをわかっているし、動物学者は野生のチンパンジーを食べ物でおびき寄せる際には、自分たちが食べ物を与えることでチンパンジーの群れの権力関係が変化しないように祈るばかりである。

発生から歴史の浅い言語を調べることは、言語がどのように発生し進化するか、ひいてはあらゆる言語の起源がどのようなものだったかを考察する機会となる。しかし、そういう言語の置かれている状況がどれほど自然に保たれているかに疑問を持つ言語学者もいる。ほんのひと握りの話者しかいない手話言語を研究すること自体が、地域外からの影響をもたらし、その言語の性質を変化させてしまう危険性があるのだ。

だからこそ、デボスはブンカラ村にいる間、他の手話言語の表現を使おうとせず、ただ(皆が話すのを)眺めていたのだ。もし自分がカタコロクの行く末を変えてしまうようなことがあれば、研究の価値は損なわれ、自然な言語進化のプロセスとは何かという問いとの関係も薄れてしまうだろう。ただ、学術的な理由だけでカタ

コロクのような言語を外部から孤立させておくのは、その言語を使うコミュニティの人々にとって必ずしも最善とはいえないという問題は残る。

「こういうコミュニティでは、自然による実験が進んでいるようなものです。現代人の脳がいま新しく言語を創り出すとしたら、それはどのようなものになるでしょうか」と現在オランダのラドバウド大学で言語学の助教授となったデボスは問う。「そのようなことが世界各地で起こっているのを目撃できるというのは、とても貴重なことだと思います。」

タイのバンコール(Ban Khor)手話からガーナのアダモロベ(Adamorobe)手話まで、新しく生まれた手話言語は言語学者が記述しているものだけでも20以上あり、おそらくそれ以外にも数多く存在すると考えられている。そういう言語をさす名称には様々なものがある。進化のプロセスに注目して「若い(young)」または「発生過程の(emerging)」言語と呼ぶ研究者もいるが、その言語が使われるコミュニティの小ささや孤立の度合いを考えて「村落(village)」や「マイクロ(micro)」と手話と呼ぶ専門家もいる。あまり頻繁には使われないが適切な用語としては、ろう者と聴者の両方で言語が使用されることに着目した「共有 (shared)」手話という呼称もある。

これらの手話言語は、地理的・文化的に孤立しており、血縁があるもの同士の結婚などでろうの住民が特に多いコミュニティで発生する傾向がある。学校教育が一般的ではなく、その国で使われている手話言語に触れる機会もなかった人々は、何十年にもわたって、手指の表現とそれを組み合わせる独自の方法を編み出した。

話者が限られており今後の存続がまだ確立していとは言えない言語は、出現するやいなや絶滅の危機にも瀕することになる。農村部やへき地の人々の文化を見下すろう団体など裕福で有力な人々が、他の手話言語を使わせようとすることも少なくない。

また、個々の手話表現の意味や使い方が、話者によって異なることもあるため、コミュニティの手話は言語として確立しておらず、中途半端なようにも見える。しかし話者が生涯にわたり毎日のコミュニケーションで使用してきたという点において、これらの手話は地域の人々にとって間違いなく、言語と呼ばれるにふさわしいものと言えよう。

これらの地域言語の研究は、それまで手話言語について考えられてきたことに革命的な変化をもたらした。例えば、すべての手話は話者の数に関わらず、体の周りの空間を同じように使って時間を表すと思われていた。過去の概念は話者の背後に位置し、現在は体の目の前、未来はさらに前方に位置するというように。しかし村落手話ではそうではないことが多い。例えばカタコロクには（訳注：時間の流れを空間の線上位置で表す）タイムラインのようなものは全く存在しない。

カタコロクの話者が将来や過去のことを考えたり話したりしないということではないとデボスは急いで付け加えた。決まった言語表現を使わず、皆が既に知っている出来事を使って過去や未来の話をするだけなのである。

村落手話の研究が手話言語の独自性の解明につながることは明らかだ。しかしそれだけではなく、村落手話の大半はその発生から 30-40 年ほど、つまり三世代程度の言語進化を含む期間が経過していると思われるため、言語の誕生をリアルタイムで目の当たりにする稀有な機会をもたらしてくれる。例えば語順のような文法規則がどのように現れ、最初の世代から次の世代の間でどのように変化するかを追跡調査することが可能になるのである。こうした変化は人間の生得的な言語能力に由来するのか、それとも何か別の能力がかかっているのだろうか？

そのような疑問への答えを見つける鍵として、村落手話は言語学者の興味を引き付けるし。それ以前に、新しい言語を「発見」することへの魅力は抗いがたいものである。

このような利害関係の深刻さや、まだ確立したとは言えない言語に悪影響を与える可能性があるため、研究者たちは長年にわたり、村落手話の扱い方について議論を重ねてきた。

．．．

南メイン大学の言語学教授のジュディ・ケグル(Judy Kegl)がのちにニカラグア手話(別名 ISN, Idioma de Señas de Nicaragua) と呼ばれるようになるものに 1980 年代半ばに初めて遭遇した時、参考にできる先行研究はなかった。

この言語は 1980 年頃に発生したもので、首都のマナグアにある学校のろう生徒たちが、自宅で使っている手話表現を持ち寄り、自分たちの言語的直感を使って創り出したものである。

生徒たちとのやりとりの際にアメリカ手話は最初から使わなかったとケグルは言う。「ジェスチャーだけを使うよう心がけました。アメリカ手話ではなくジェスチャーを使うことで、生徒たちは私に教える教師役をしてくれたのです。もし私がアメリカ手話を使っていたら、そうはならなかったでしょう。子どもたちの言語を学ぶことが私の目的だと気づいてくれたから、私の面倒を見ようという気になってくれたのです。」

言語をそのまま保存するという事より、自分がいようとしまいと同じように言語が進化していく環境を確保することがケグルの目的だった。「スタートレック」という SF テレビ番組シリーズに出てくる「他の文明に立ち入り、その文明が決定することに調査者自身の考え方を当てはめて影響を与えてはならない」という「最重要指令(Prime Directive)」の方針を貫いたという。

生徒たちが自らアメリカ手話の表現を取り入れても、ケグルはそれを止めなかった。ただ「(ニカラグア手話の) 汚染」が起きるとしても、自分たちの活動がその直接の原因にならないようにしたかったのである。

言語学を専門としない人々は、小さなろうコミュニティには確立した手話言語を教えるなどの方法を通じて、より大きなろう文化と積極的に一体化させていくことが望ましいと考え、ケグルの研究方針を批判している。

ケグルの研究成果が1999年にニカラグア手話の発生を伝えるものとして紹介された際、ブラウン大学の哲学の教授であるフェリシア・アッカーマン(Felicia Ackerman)はケグルの研究方針を強い言葉で非難した。

「どうやら（ケグルは）こうした子どもたちが外の世界とコミュニケーションが取れないままにして、子ども達のその後の人生の可能性を閉ざしてもよいと考えているように思える」とアッカーマンは述べている（この記事を作成する際、今も同じ考えかをアッカーマン教授に問い合わせたが、返答は得られなかった）。

新しい言語がどこからともなく出現するという考え方はあまりにもできすぎていると考える言語学者もいる。人間が生得的な言語能力を持つという（賛否両論ある）理論に都合がよすぎるように思えるからだ。そういう研究者が疑ったことは、ニカラグア手話話者の第一世代の子ども達は早い段階に、見えないところで他の手話言語に触れたのではないかということだ。そうした批判を避けるため、後のコニー・デボスのような言語学者たちは（訳注：ケグルが言っていた）「最重要指令」に厳格に従うことを選んだ。

デボスはブンカラ村がそれほど孤立した地域ではないことをよく認識しており、土地の手話が「汚染」される可能性をできる限り避けたいと考えていた。デボスは国際手話・イギリス手話・オランダ手話の知識があるが、それらの表現をうっかり土地の人々に見せることが絶対にないようにしたかったのだ。

「自分の手話表現をあまり使わない自信が持てるまでの二か月程度、私はただ見るだけにしていました。大きな影響を与えないようにしていたのです」。人々がデボスの手話を知らず知らずのうちに取り入れてしまうことで、カタコロクの自然な言語進化が報告できなくなってしまうことを恐れていたのだ。

無論、こうでなければ純粋な言語発生を保証できないわけではない。完全に孤立したコミュニティで使われている村落手話を見つけるという手もある。

...

2012年、若きトルコ人学生であったラビア・エルギン(Rabia Ergin)はタフツ大学大学院の授業に出席していた。トルコ語統語論を学ぶためにアメリカに来たエルギンだったが、その目的がいま大きく変わろうとしていた。エルギンと他の院生は、ホームサイン、つまりろう者とその家族が考案したジェスチャーの集合体について議論していた。疑問文や動詞の存在を示すような規則が確立されていなくても、ホームサインは言語と呼べるだろうか？

エルギンには何がそこまで大ごとなのか分からなかった。トルコにいる自分の家族内のろう者が手話言語を作り出し、村の皆がその手話を使ってコミュニケーションを取っていたことを話した。

それを聞いた院生たちは、開いた口が塞がらなかった。

エルギンは平然とした様子で、今まで誰も聞いたことのない孤立したコミュニティで使われる村落手話について説明していたのだ。

その後まもなく、彼女は研究対象を中央トールラス手話(Central Taurus Sign Language, CTSL)と称するこの言語に切り替えた。「私自身がこのコミュニティの一員であり、この言語で育ったことを思うと、胸が熱くなります」とエルギンは語る。

エルギンが研究のために現地を訪れた頃、CTSL話者は三世代目となっており、言語として新たな構造を確立しつつあり、人や物の動きを表す共通の表現が以前よりも確立していた。これは(訳注:エルギンにとって)めったにない、心が躍る時期だった。ある言語の成長と変化を見ることができるだけでなく、前世代の手話話者がまだ生きていたため、これまでの発展過程を時間とともに遡ることができたのだ。

CTSL はまだ歴史の浅い言語だが、エルギンは自分の存在が CTSL を汚染の脅威にさらすとは考えていない。CTSL 話者、とくに高齢者の世代には、例えば他の言語のタイムライン表現を取り入れる様子は見られないという。人々は何を話すときでも CTSL を使用し、意思疎通に不自由を感じることはない。「完璧に言語としての役割を果たしています」とエルギンは語る。

この言語の規則は厳密に定まっておらず、話者はそれぞれ自分流の CTSL を使用している。言語の一部が共有されている一方、その時に即興で作られるものもあるということだ。同じ手話話者の表現が時と場合によって変化することもある。

そのため、CTSL は孤立した状況で発生したものではあるが、現在急速な変化の最中にある。

現在マックス・プランク心理言語学研究所に在籍しているエルギンが追跡調査しているのは、2年前に近隣のアナムール市(Anamur)に引っ越した、全員が CTSL を使うろう者の 5 人家族である。アナムールに引っ越したことで彼らの手話表現はトルコ手話に影響され、村の主要な CTSL 話者たちと同じような手話表出ではなくなった。エルギンのいとこの一人も他の町のろう者と出会って結婚してから、CTSL の表現が変わりつつある。

「だからこそ、手遅れになる前にできるだけ多くのデータを収集しようとしているのです」とエルギンは語る。

...

村落手話を全く新たな考え方で扱う方法も登場した。イギリスのセントラル・ランカシャー大学のウルリケ・ゼシャン(Ulrike Zeshan)は、村落手話をアメリカ手話などのような手話言語と全く同じ扱いをした初めての言語学者だった。この方法では、村落手話は言語以前の未発達のもののような特別扱いを受けず、成熟するまで観察して保護すべきものともみなされない。村落手話は他の手話言語と同じように比較の対象となる。

この発想の転換によって、手話言語として「普遍的」とされていた性質が村落手話には欠落しており、よってその性質は普遍的なものではなかったと考えられるようになった。例えば、誰もが（訳注：手話言語に）普遍的であると考えていたものには、話者の身体の前空間を舞台と見立てて、手を操り人形のように使うというものがあった。「牛が車の前で道を横切った」という文を表すとき、多くの手話言語では「牛」「道路」「車」が話者の身体の前で動かされる。

しかし、村落手話では、話者が一連の動きの外側にいる操り師のように表現しないことがある。ガーナのある手話では、牛、道路、車のそれぞれの描写が話者の視点からなされる。だからこそ言語学者たちは、手話言語の文法にどのような可能性があるのかについて、視野を広げる必要に迫られるのだ。

それでも言語学者たちには（訳注：倫理的な）責任をもって研究行動を行う必要がある。数年前、ゼシャンと他の研究者たちは村落手話に遭遇する研究者へのアドバイスを含めた学術論文を書くことにした。

しかし、研究者の地域社会に対する倫理的責任を考えるにあたって、ゼシャンたちは思わぬ壁にぶつかった。村落手話に対する研究の関心は地域に何をもちこたすのか？政府当局に注意を呼びかけるべきか？その結果、もし当局が補聴器や他の機械を使った介入を始めたらどうするのか。もし村の人たちがその国で確立した別の手話を使うことを強制されるようなことになったら、人々の身体的な自立と地域の言語が脅かされることになり、文化的ろう者の見地から見て非常に深刻な問題となる。

「私たちは倫理的な研究の進め方について、一致した結論に至ることができませんでした」とゼシャンは言う。結局、論文の執筆は取りやめになった。

それは、科学者が未知の言語を見逃してしまうことを意味するのではないだろうか？ そうだとゼシャンは認めるが、科学的な損失よりも倫理的問題の方が大事だという。「ある意味、自分のせいで悪影響を及ぼすよう

なことになるのであれば、何も行動を起こさない方が、まだ良心が咎めることが少ないように思います」とゼシャンは言う。

言語学者や人類学者が従うべき明確な倫理的ガイドラインがないのであれば、他の言語との接触をどのように行うかは研究者自身が自ら考えることになる。

しかし、村落手話の研究が盛んになるにつれ、個々の研究者の対象言語への影響は当初思われていた以上に減らせることがわかってきた。そういうことは、小さな失敗体験があって初めてわかることである。

．．．

2012年、リナ・ハウ（Lina Hou）とケイト・メッシュ（Kate Mesh）は、メキシコのオアハカにある2つの小さなコミュニティの村落手話であるチャティーノ（Chatino）手話を研究していた。現在、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の言語学准教授であるハウはろう者で、イスラエルのハイファ大学在籍のメッシュはろうではない。しかし、二人ともアメリカ手話の話者である。

「調査現場のコミュニティでアメリカ手話を使わないようにするため、筆談だけを使うことから始めました」とメッシュはいう。しかし、二人は何度もアメリカ手話を使う失敗をしてしまった。

アメリカ手話を隠し通すことはできなかったのだ。大人の手話話者は、すぐに二人が外国の手話を使っていることに気づいた。

その時、地元の手話話者はどう思ったのだろうか。「アメリカ手話を見るのは面白いと思ったようです」とメッシュは回想する。それでも手話話者たちは、ハウとメッシュの様子について話す時以外にアメリカ手話の表

現を使うことはなかった。そこで、二人は地元の手話話者がいる場所でも少しずつアメリカ手話を使うようになった。コミュニケーションが楽になったうえに、チャティーノ手話への影響も観察されなかった。

メッシュはチャティーノ手話で話しているときに、誤ってアメリカ手話の文法を使ってしまったこともある。ある日、現地の手話話者と、参加者からの寄付金で賞金が支払われるという村のバスケットボール大会について話をしていた時のことだ。

「全員がお金を払うということ？」とメッシュは質問した。その時チャティーノ手話を使っていたにも関わらずアメリカ手話の文法を使って、2人以上の人がお金を払っているという意味で、身体の前の2か所の空間で「(お金を)払う」という動詞を2回ずつ表してしまった。

チャティーノ手話にはこのような表現方法がない。メッシュと話していた男性はやはりチャティーノ手話話者である妻を呼び、メッシュがやった手話表現を真似して見せた。その表現が面白かったらしい。だがメッシュは、その後この男性が「支払う」でも他の動詞でも、アメリカ手話のような空間を使った表現を使っているのを見ていないという。この体験からメッシュは、村落手話の話者が他の手話言語に簡単に影響されるとは限らないことを悟った。

どの言語にも足りない部分があるものだ、とコネチカット大学の言語学者マリー・コッポラ(Marie Coppola)は指摘する。英語・イタリア語・中国語といった話者数の多い音声言語であっても、うまく表現できることそうでないことがある。例えば、英語では親族の呼び方の単語が十分にはそろっていないし、英語の呼び方はないが「使える」概念のリストもまた、インターネットでしょっちゅう出回っている。

言語の使用者は、自分の言語では表現しきれないことがあるとは気づいていないことがほとんどで、それは話者数の少ない手話言語の使用者にも当てはまる。「いまコミュニケーションがうまくいかなかったなという程

度のことはわかるでしょうが、それも毎日の生活の一部ととらえられているでしょう」コッポラは言う。「他の言語ではどうだろうと比べてみるのがないのですから」。

仮に自分たちが直面しているコミュニケーション問題の解決策があるとしても、大人であれば自分の言語が変わることには抵抗感を持つものだ。年を重ねても新しい語彙を学ぶことはそれほど難しくないが、新しい文法体系を習得することが困難になっていくことがその理由の一つである。

メッシュが自らの体験から学んだように、新しく発生した手話に個人レベルの訪問者はほとんど影響を与えないとしても、より広範な社会的および文化的な変化にはもっと大きな影響力があると考えられる。かつては孤立していたコミュニティが他地域とのつながりを増した結果、話者が自分たちの手話言語を変えていき、その中にはもともとあった手話を使うことや、次の世代に伝えることをやめてしまう人もいるかもしれない。

現代的な生活様式は、少数言語にとってこれまでになかった不利な状況をもたらしている。コニー・デボスが最初の訪問からわずか6年後の2012年にブンカラ村を訪ねてみると、多くのことが変わっていた。年間に数百人の観光客が、皆が手話で話すと言う村を訪れ、現地での食費や宿泊費でお金を使ったり、村に寄付をしたりしていたのだ。

新しい収入源を得て、ブンカラ村の人々は皆オートバイを買い、村から離れた場所へ通勤する人が多くなった。若い男性がコミュニティの外の女性と結婚することも増えた。インドネシアの手話である BISINDO を教える学校に通い始めたろう児もいた。観光客によってもたらされたのと同様の影響力を、たった一人の研究者が与えたかどうかを見極めるのは難しいだろう。（訳注：村の手話に影響を与えた）観光客の多くがろう者であったというのは皮肉なことである。

カタコロクは生き残れるだろうか？言語の歴史は栄枯盛衰であふれている。村落手話の例が教えてくれることは、外界から孤立することが言語の存続を保証するし、その孤立状態が成立しなくなった時には、存続を図るために何か効果的な、新しい対処法が必要になるということだ。

...

矢野羽衣子は、1920年代から1930年代に日本の愛媛県大島に発生した宮窪手話を、生まれた時から使っている。現在、筑波技術大学の大学院生である矢野は、科学的視点からこの言語を考察した最初の言語学者である。

矢野は、カタコロクについてのドキュメンタリー番組をテレビで見、みんなが手話で話す故郷を思い出したという。「（私の故郷は）ろう者も聴者も関係なく、みんなが自然に手話で会話をするコミュニティで、とても珍しいと思います」と、通訳を通して矢野は語った。

宮窪手話を最初に使い始めたのは、漁船で働いていた15人ほどのグループだった。そのため、この言語では30や40などの10の単位よりも細かい数や、200を越える数字表現の規則ができることはなかった。「25はどう表す？」矢野は父に尋ねた。

「200以上と言うだろうね」と父は答えた。

「でも223本のジュースがあったら」と矢野は尋ねた。「どう表現する？」

「どうしてそんなにたくさんジュースが必要なんだ？」というのが父の返答であった。

矢野の父と、その兄弟姉妹は全員ろう者である。長年にわたり、本土にある聴覚障害者協会からの接触はあったが、連絡をとることは断り続けてきた。

「自分たちの手話を変えられたり、その手話は間違いと言われるのも困ると思ったから」矢野の父は言う。「もしあちらの決めることに合わせていたら、おじいさんやおばあさんと話が通じなくなってしまうよ。」

何十年もの間、本土への唯一の交通手段は1日に数便のフェリー船だった。人々は集まって船を待つ間、音声や手話で話していた。

その後2004年に愛媛県大島から本土への橋が架けられ、フェリーの運航が廃止された。多くの人はずがPCで、それからスマートフォンでインターネットにアクセスするようになった。他島の人たちとの結婚も増えた。

つまり、約7000人の島の住民が、以前よりも外の地域とつながったことになるが、その一方、宮窪手話話者のろう者はより孤立することとなった。フェリー船がなくなったことで、フェリー乗り場に集まって情報交換をする機会がなくなり、インターネットが使えることで、互いに頼みごとをする必要があることも少なくなった。そして聴者が仕事のために島を離れた結果、宮窪手話話者の数も減少してしまった。

現在、島にはおよそ15人のろう者が暮らす。矢野は東京から友達を連れてきて自分が生まれ育った場所を見せて回ることを好むが、70代である彼女の叔母はそれを見て悲しくなると言う。「羽衣子たちの様子を見ていと寂しくなる」と言う叔母に、矢野はその理由を尋ねた。

「東京から人が来ると…うちらもあちらの手話を使って、何を言っているかわかるようにしてあげないといけないから」と叔母は答えた。

叔母の平和な島の世界に、外の世界が侵入している。「前は、何でも自由に話せてお互いのことがよくわかったから、楽しいことも苦しいことも一緒に分け合うことができた。でも今は、宮窪手話を知っている人がいないからね。知らない手話（表現）が多すぎて、他のろう者が何を言っているかも私にはわからない。」

...

若者と聞いて私達が思い描くイメージは、外からの影響を受けやすく、自分がやることに責任を持たないいいかげんな人間かもしれない。「若い」手話言語はそのようなものではなく、自分がよく知る範囲の中で現実的に生活する人たちによって使われている。

言語学者が、新しく発生した手話に影響を与えることを避けようと度を越えた配慮をすることは、言語を科学的な関心の対象物として見る視点と関わっているのであって、その言語を使っている人々の毎日の体験と深いつながりがあるわけではない。

しかし人間の言語はすべて、人々が貿易や仕事、遊び、結婚を通して互いに接触する中で進化するものである。単語だけでなく文法のパターンが、ある言語から別の言語へ伝わる可能性もあるだろう。異なる地域の交流が増えていくにつれて、言語学者たちは自分たちが研究する言語の変化のスピードの速さに対応することを学び、その言語の発展にも貢献することになっていく。

コニー・デボスは過去の体験を振り返って、調査期間の初期に、玄関のポーチで手話をせずにただ眺めていようとしたことは、過剰反応だったかもしれないと認める。

のちに、デボスは村の人々に直接、地域の手話言語を変えてしまうかもしれない外部からの影響について話をした。「とにかく情報を伝えて、意識してほしいのです」とデボスは語る。ろう者が世界中にいることを伝え、そのようなろう者は村の手話とは違う手話を使っていること、自分はその違いに興味があることをデボスは人々に説明した。

最終的に、デボスは子どもたちがカタコロクで教育を受けられる学校の設立に尽力することになった。

「もしかしたら、最初の頃は気を遣い過ぎていたかもしれない」とデボスは言う。しかしカタコロクだけを使って調査をしたからこそ聞いた話があったとも思う。

そんな物語の一つに、なぜブンカラ村にはろう者が多いのかという昔話がある。子どもをどうしても授かりたかったある夫婦が、生まれてすぐか、生まれる前に亡くなった子どもたちの墓地に供え物をしていたところ、そこに住む幽霊が彼らの願いを叶えたという。その幽霊がろうだったため、子どももろうになったという話だ。

若い手話には、若い世代の手話話者が不可欠である。愛媛県大島では、矢野の聴者の甥が宮窪手話の最年少の話者である。その甥が宮窪手話の最後の話者になることを矢野は望んでおらず、宮窪手話が生き残る術を模索している。

「宮窪手話に対して、何か責任感のようなものはありますか」と私は尋ねた。

矢野は少し間を置き、手話で話し始めた。「島の人たちが宮窪手話のことを意識して考えることはほとんどありません」と通訳者が話す。「表面的には特別なものとは思われていないかもしれませんが、心のどこかで特別だと感じる気持ちがあるからこそ、私達は宮窪手話を使い続け、捨ててしまいたくないと感じるのだと思います。」

2020年6月

日本語訳作成：安達そら・蓮池通子・松岡和美・矢野羽衣子

翻訳監修：松岡和美